

曹洞宗の近世的寺院の成立

圭 室 文 雄

はじめに

現在日本における曹洞宗寺院は約一万五千か寺存在している。このうち有力寺院については中世文書や近世文書を所蔵している寺があり、その成立時期がわかるが、その他の多くの寺院については成立時期をこれまでは「由緒書」・「歴代世牌帳」・「地誌」などで類推するしかなかった。ところが今回藺田香融編著『南紀寺社史料』（関西大学東西学術研究所資料集刊二十五）が出版されるに及び、曹洞宗寺院で寛文年間に創立したものが数多くあることがわかった。そこでこの史料を分析して曹洞宗の近世的寺院の成立を明らかにしてみたい。

ここである近世的寺院とは寺院が宗門人別帳（戸籍）を作成する任務を持った寺院のことである。つまり寺院はこの宗門人別帳を作成することにより、檀家（葬祭檀家）を完全に把握することが出来たわけである。

幕府は一六三八年（寛永一五）の島原の乱を契機として、全国の寺院に寺請証文の作成を命じた。寺請証文とは寺院の住職がその周辺に住む人々がキリスト教徒ではないと身分保証をした証文を書くことである。しかしこの段階では寺

請証文を作成するための寺院の絶対数が少なく、そのため各宗派では村々にある持仏堂といわれる阿弥陀堂・観音堂・地藏堂・不動堂・大日堂・釈迦堂などに各宗派の有力寺院が弟子の僧侶を派遣し、末寺として把握していく方法をとった。このことから寛永年間の開基伝承を持つ寺院の数が非常に多い。そしてこれ等の寺が人々の寺請証文を作成し自分の寺の檀家として位置づけていったのである。この時期に成立した寺は管見の限りでは圧倒的に一向宗が多い。他宗はもう少し遅れる。これが近世的寺院の成立の第一段階である。キリスト教の信仰が浸透していた九州地方では、大名がこの時期寺請証文を村毎に集めて村単位でその構成員全てを書き出しているところもあるが、全国的には村単位の宗門人別帳が作成されるのはもう少し時代がさがる。

ところでここで取り扱うのは近世寺院の多くが成立した第二段階である寛文年間（一六六一～一六七二）を取り上げてみたい。

幕府は寛文四年（一六六四）十一月各大名に対して次のような法令を布達している。

きりしたん宗門穿鑿の儀、巷万石以上の面々は、今度仰せ出され候ことく、役人を定め、家中・領内毎年断絶なく、あい改むべきこと（『御触書寛保集成』）

と、各大名は領内に宗門奉行（寺社奉行）を置き、キリシタン弾圧を強化するように指示している様子がわかる。

この段階での寺院の任務は家単位の宗門改証文を作成し、それをまとめて村単位の宗門人別帳を作成することであった。檀那寺はそれぞれの家族名の上にキリシタンでなければ、檀那寺の判形を押印するのが仕事であった。

そのためまず藩主としては寺請をするための現存の寺院数とその存在地域、並びに住職自身がキリスト教徒でないこ

とを調べる必要があった。

各藩においてはこれに対応すべく寛文五年には藩内に宗門奉行を置き、その下に各宗寺院の僧録（触頭）を定め、これを軸にして各宗派寺院を把握し、その寺を通じて民衆の中のキリシタンを徹底的に洗い出す方法をとった。そこで必要なのは宗門人別帳を作成する寺院の創立であった。これが近世的寺院成立の第二段階である。

ところで、ここで取り上げた宗応寺について若干記しておく。「宗応寺由緒書上」によると、

慶長二酉八月、本山永平寺より牟婁郡僧録相勤候様、掟書指越僧法仕置相勤候、其後寛永十二亥秋同寺（永平寺）秀察和尚より、僧録有馬安楽寺と以相談仕置可申付旨、御朱印表を以、僧録壁書被指越、夫より相統仕候而、曹洞一宗之支配当（「寺」抜けか）・安楽寺両寺ニ而相勤来候、本山永平寺壁書無断絶被指越候事（『南紀社寺史料』二九五頁）

とみえている。

宗応寺は慶長二年（一五九七）に紀伊国牟婁郡の僧録になり、永平寺の命によって寛永十二年（一六三五）から有馬安楽寺と宗応寺が相談しながら僧録職として末寺を統括・支配するように指示されている、と受け取れる文言である。しかしこの部分は曹洞宗僧録制度とは聊か異なる。曹洞宗の窓口である龍穩寺・総寧寺・可睡斎を僧録として幕府が認めたのは慶長十七年（一六一二）であり、大中寺が僧録になったのは元和元年（一六一五）であるので、宗応寺が慶長二年に僧録に指名されたというのは疑問が残る。なお、龍穩寺・総寧寺・大中寺はその後寛永十二年（一六三五）、幕府が設置した寺社奉行の支配下に入り、曹洞宗触頭寺院となり、関三利と称された。

ところで、曹洞宗が地方僧録制度を設立したのは寛永六年（一六二九）のことであり、この時に本山である總持寺がその末寺の中から全国にある有力寺院五六か寺を僧録寺院ときめている（横浜總持寺文書・能登總持寺祖院文書）。その中には紀伊国は一か寺も含まれていない。紀伊国が僧録帳に登場するのは延宝九年（一六八一）「曹洞宗諸国僧録寺院書上」（永平寺文書）が初めてである。この時は僧録寺院が寛永六年の時よりも急増し、全国に一四七か寺設定されている。その中に紀伊国では和歌山珊瑚寺・憲譽寺・長松院・久昌寺・法泉寺・高松寺・大泉寺・林泉寺の八か寺と、牟婁郡では新宮宗応寺・有馬安樂寺の計一〇か寺が入っている。尤も和歌山八か寺はそれぞれ年番で僧録職を務めている。この時僧録寺を全国に設定した理由は寛文四年の幕法により大名領ことの宗門奉行（寺社奉行）が設置されたため、その下で宗派毎の末寺を管理・支配する僧録寺院が新設されたものと考えられる。それゆえ宗応寺が僧録としての地位を得たのは寛文四〜五年（一六六四〜五）頃と推定される。

ここで取り上げた史料は和歌山県新宮市曹洞宗宗応寺文書であり、先述の藺田香融編著『南紀寺社史料』に所収されたものである。その中から今回は寛文五年（一六六五）三月「本末末相極内支配下より一札」と、寛文十一年（一六七一）十月「諸寺院江入末一札」の二点の史料を中心に分析してみたいと思う。

宗応寺は和歌山県新宮市にある曹洞宗通幻派寺院で、中本寺は伊豆国宮上最勝院、開山は大用精賢、本尊は釈迦如来、古くは天台・法相兼学の律院であったとされる。近世には紀伊国牟婁郡の曹洞宗僧録寺として通幻派安樂寺（熊野市）とこの地域を分割支配していた。この僧録二か寺とも本山は總持寺塔頭五院のうち妙高庵である。

一、寛文五年頃成立の末寺の様子

ここで取り扱った史料は「本末末相極内支配下より一札」である。このタイトルを文字通り読むと、寺院の本寺・末寺の關係がまだ正式には決まっていらない段階で、小寺から僧録へ提出された曹洞宗寺院の明細書上げである。その形式を紹介すると次の如くである。

「永明庵源龍屈書」

今度宗旨御改請狀之事

一拙僧生国甲斐国駒（巨摩カ）郡岩間村、剃髮之師者能満寺達道也、四年已前当国へ罷越、唯今二木嶋之内次（須カ）野村永明庵ニ住居仕候、本寺者二木嶋西明寺ニ而御座候、年廿五、右之通相違無御座候、為後日一札如件
寛文五乙巳年三月朔日

永明庵源龍（花押）

新宮宗応寺

有馬安樂寺

御役者中

（『南紀寺社史料』二〇頁）

とある。内容を検討してみよう。これは僧侶の宗門改証文であることがわかる。永明庵は現在三重県熊野市須野町にある永命寺のことと思われる。永明庵源龍は甲斐国巨摩郡岩間村の出生、剃髪の師匠は同郡草鹿沢村能満寺達道で、源龍は四年前紀伊国へやって来て現在紀伊国牟婁郡二木嶋村永明庵を住居としていて、年齢は二五才で、本寺は二木嶋村西明寺である。その後、年月日をしるし、本人からこの地域の僧録寺院である宗応寺・安樂寺の両寺に宛てて提出していることがわかる。このような形式で寛文五年に宗応寺へ証文を提出した寺院は七八か寺にのぼる。以上の寺々には牟婁郡の古刹や有力寺院は含まれていない。このことから寛文年間より若干遡るころ成立した寺院のみを書き上げたものと思われる。

次に第1表をみてみよう。まず本寺の項をみると、第一に最初の金山村海岸寺のように本寺安樂寺と記されている寺は全体で二九か寺、これは本末関係が成立している寺と思われる。第二に遊木村光明寺のように本寺長福寺sとあるのはsは師匠の寺を指す。sが付されている寺は一八か寺にのぼる。これはまだ完全な本末関係が成立しておらず師匠の寺をそのまま本寺として書き上げたものと思われる。第三には本寺名が記されていない寺と()の寺である。全体で三〇か寺を数える。これはまだ本末関係が決まっていない寺と考えていいと思う。なお表の本寺の項に()で寺名をいれたのは一六六五年には本寺は記されていないが、一七〇七年段階では既に本末関係が形成されていること示している寺である。空欄の部分は一七〇七年段階ですでに廃寺となっている寺で、これまでの過程で本末関係が結ばれたかどうかは判明しない寺である。つまりこの表から一六六五年ころまでに急ぎ創立された寺の成立に三つの段階があったことをうかがわせる。一六三八年に寺請証文作成が寺院に義務づけられてから徐々に曹洞宗寺院が成立していく過程がみえ、正式に寺として公的に登録されたのが寛文五年の時期と言っても過言ではないと思う。

次に寺名のところをみて頂きたい。〇〇庵の名称がかなりあることがわかる。その数二〇か寺に及ぶ。全体の約二六

第1表 曹洞宗 紀伊国牟婁郡寺院本末未定の段階の書上（宗応寺支配分）

	村 名	寺 名	本 寺 名	1707年 本末帳	1747年 本末帳	現 存
1	金 山	海岸寺	安楽寺	○	○	○
2	木 本	極楽寺	心月寺	○	○	○
3	木 本	大雲寺	(心月寺)	○	○	○
4	木 本	熊福庵	(極楽寺)	○	○	○
5	大 泊	青泰寺	(心月寺)	○	○	○
6	泊	海恵寺	(安楽寺)	○	○	○
7	新 鹿	長福寺	宗持院	○	×	○
8	遊 木	光明寺	長福寺 s	○	○	○
9	二木嶋	西明寺	安楽寺 s	○	○	○
10	二木嶋	江月庵	西明寺	○	○	×
11	甫 母	海善寺	(西明寺)	○	○	○
12	二木嶋之内須野	永明庵	西明寺	○	○	○
13	曾 根	安定寺	(広禅寺)	○	○	○
14	梶賀浦	地藏院	安定寺	○	○	○
15	嘉 多	東前寺	(広泰寺)	○	○	○
16	古 江	光明寺	安定寺 s	○	○	○
17	三 木	宝(法)念寺	(心月寺)	○	○	○
18	名 柄	清昌寺	法念寺	○	○	○
19	三木浦	龍泉寺	法念寺 s	○	○	○
20	九 鬼	真岩寺	広禅寺	○	○	○
21	大曾根浦	海蔵庵	常声寺	○	○	○
22	尾鷲矢之浜	円通寺	光林寺	○	○	×
23	尾鷲矢之浜	林光院	常声寺	○	○	×
24	尾鷲矢之浜	高声寺	常声寺	○	○	×
25	尾 鷲	常声寺	心月寺 s	○	○	○
26	尾 鷲	自性院	光林寺	○	×	×
27	尾 鷲	光林寺	功雲寺 s	○	×	×
28	尾鷲野地	寿蓮庵	光林寺 s	×	×	×
29	尾鷲野地	地福庵	光林寺	×	×	×
30	尾 鷲	長源庵	光林寺 s	○	×	×
31	尾 鷲	西明寺	光林寺	×	×	×
32	尾 鷲	知足院	光林寺 s	×	×	×
33	便 山	宝泉寺	普門院 s	○	○	○
34	小山浦	長泉寺	功雲寺	○	○	○
35	粉 本	雲祥寺	龍福寺	○	○	○
36	舟 津	永泉寺	永平寺	○	○	○
37	中 里	清雲庵		×	×	×
38	相賀谷上里	修禅寺	常光院	○	○	○
39	馬 瀬	青龍寺	常光院 s	○	○	×

	村 名	寺 名	本 寺	1707年 本末帳	1747年 本末帳	現 存
40	引 本	吉祥院	功雲寺	○	○	○
41	須賀利	普濟寺	龍福寺 s	○	○	○
42	須賀利	安樂寺	龍福寺 s	×	○	○
43	白 浦	常林寺	龍福寺	○	○	○
44	海 野	隨泉寺	常光院	○	○	○
45	長 嶋	常光院	清泉寺 s	○	×	×
46	錦	金蔵寺	常光院	○	○	○
47	二 郷	養海院	常光院	○	○	○
48	二 郷	地藏院	常光院	×	○	○
49	大 原	大昌寺	常光院 s	×	○	○
50	高 瀬	長徳寺		×	×	×
51	本 宮	大知庵		×	×	×
52	松 根	永泉庵		×	×	×
53	見老津浦	常栄寺		×	×	×
54	新宮川原	正学庵		×	×	×
55	串	福德庵		×	×	×
56	本 宮	以福寺		×	×	×
57	天満浦	地持庵	常声寺	×	×	×
58	檜 葉	正法庵		×	×	×
59	長洞尾	宝音庵		×	×	×
60	田ノ原	水泉庵		×	×	×
61	湯 屋	光祝庵		×	×	×
62	田辺玉手	光明寺		×	×	×
63	向 井	観音寺	常声寺	○	×	○
64	切 原	桂月庵		×	×	×
65	尾呂志	長徳寺	(安樂寺)	○	○	○
66	赤 羽	永昌寺	永賞寺 s	×	○	×
67	古座中崎	洞泉寺		×	×	×
68	入 鹿 (大栗須)	光明寺	慈雲寺	○	×	×
69	添之川	善光庵		×	×	×
70	里ノ浦	長福寺	大倫寺 s	×	×	×
71	切 原	福定庵		×	×	×
72	他 川 (田川)	瀧泉寺		×	×	×
73	切 原	正源寺	長徳寺 s	×	×	×
74	三 越	長命寺		×	×	×
75	湯 谷	慈雲院	光明寺	○	○	○
76	一 雨	慈眼寺		×	×	×
77	下湯川	淵龍寺		×	×	×
78	古座川西川	宝光寺	福昌寺 s	×	×	×

寛文5年(1665)現在

参考文献

sは住職の嗣法師の寺

()は宝永4年(1707)寺院本末帳の本寺名

％、つまり四分の一の数字である。このことはこれまでの村持や個人持の堂宇が急に寺に昇格した様子を物語っている。

さて次に一七〇七年（宝永四）の本末帳の項、正式名は「紀州牟婁郡中曹洞寺院員数覚」をみてみよう。○印がこの段階に現存するものである。寛文五年に七八か寺あったものが四三年後には四五か寺に激減している事がわかる。×印は廃寺であるが廃寺率は約四二・三％である。さらに四〇年後の一七四七年（延享四）の本末帳、即ち「延享度曹洞宗寺院本末帳」をみてみるとこの時存在する寺は四二か寺、廃寺率は約四六％を数える。さらに、現存するのは三八か寺、廃寺率は五一％にのぼることがわかる。寛文五年段階で村落の堂宇に曹洞宗の有力寺院が弟子を派遣し、寺として昇格させ檀家を獲得すべく努力したが、他宗派の進出に比べて遅れていたため、落穂拾いの状態で、経営可能な滅罪檀家数を獲得することが出来なかったことをこの数字がしめしている。その結果ほぼ半数しか現存していない。

寛文五年（一六六五）に○○庵と称していたものが二〇か寺あったが、これ等の○○庵のその後を追跡してみると、宝永四年（一七〇七）「紀州牟婁郡中曹洞寺院員数覚」（能登總持寺祖院文書）によれば、庵から寺に昇格したのは本本村熊福庵↓熊福寺の一か寺である。延享四年（一七四七）「延享度曹洞宗寺院本末帳」（横浜總持寺文書）によれば、庵から寺に昇格したのは須野村永明庵↓永明寺一か寺である。大曽根浦海蔵庵↓海蔵寺になったのは一七四八年以降のことである。○○庵二〇か寺の内一六か寺は延享四年には廃寺、二木嶋村江月庵は延享四年には存在するが、その後廃寺となっている。

以上寛文五年「本末未相極内支配下より一札」を分析してきたが、ここに所収されている七八か寺の証文の書式は殆ど同じである。これは僧録寺院である宗応寺・安楽寺があらかじめ案文を作成し、これに末寺住職や村役人に記入させたものと考えていいと思う。

二、寛文十一年頃成立の末寺の様子

寛文五年の調査が曹洞宗僧侶の宗門改と宗門人別帳的性格であったのに対して、寛文十一年のものは、「諸寺院互入末一札」とあり、これは新たに成立した寺を中本寺末に編入すべく願書を作成したものであることがわかる。たとえば「請川村祐泉寺等四ヶ寺指上一札」を紹介してみると、

指上申一札之事

一、請川村祐泉寺、皆瀬川大蔵庵、小津荷向林庵、耳打村泉蔵庵、禪家曹洞宗従古来本寺無御座候、今度寺々本末御改ニ付、新宮全龍寺を本寺ニ相定申所紛無御座候、以来如何様之儀御座候共、本末之次第違背仕間敷候、此外住僧移替之時者、本寺へ御相談可仕候、為後日仍一札如件

寛文十一年亥十月三日

請川村祐泉寺 無住

皆瀬川村大蔵庵 無住

小津荷村向林庵 無住

耳打村泉蔵庵 無住

請川年寄 喜兵衛印

皆瀬川庄屋 佐大夫印

小津荷庄屋 長蔵印

耳打庄屋

作兵衛[㊦]

請川大庄屋

助太郎[㊦]

宗応寺

安楽寺

〔南紀寺社史料〕五五―六頁〕

とあり、祐泉寺・大蔵庵・向林庵・泉蔵庵の四か寺を曹洞宗新宮全龍寺の末寺に編入してもらいたい由、申し入れている証文である。さらに、如何様なことがあっても本寺の命には背かないこと、を誓約している。また住職任命に当っては本寺に相談して決めること、も約束している。ところが四か寺とも無住であり、この段階では僧侶は居住していない。文書の形式としてはこの四か寺が存在する村の庄屋・年寄が差出人になっており、さらにそれを統括する大庄屋が連署していることがわかる。

この段階に成立した寺は曹洞宗側の必要性から創立されたもののみではなく、むしろ村落側の必要性から寺が創立されたといえる。つまり寺請証文を書いてもらい、宗門人別帳を作成してもらうためには、村落側からどうしても寺院が必要だったのである。そのためこのような形式で村役人達が僧録宗応寺・安楽寺へ証文を提出したのである。さしあたり僧侶が住まっていなくとも僧録が寺として認めてくれればいずれ住職が入るという前提であった。これ等の四か寺は無住であったが、その後いずれも住職が入り、江戸時代を通じて続いていた。しかしこのうち二か寺は現在は廃寺となり、現存するのは二か寺のみである。

以上みたようにこれ等の寺は村落側が宗門人別帳を作成してくれる寺の創立をすすめた例である。幕府が全国的に民

衆に至るまでの宗門人別帳の作成を命じたのは寛文末年以降のことであった。その前提として寺請寺院がない村に寺院を創設することは急務であった。

さて第2表をみてみよう。この表は寛文十一年（一六七一）までに成立した寺をそれぞれの中本寺の末寺として編入した時の表である。

まず僧侶の有無の項を見ていただきたい。○印は僧侶がいる寺で二六か寺、全体の五二%、僧侶がいない無住の寺は二四か寺で全体の四八%である。ほぼ半数の寺がまだ無住であることがわかる。ここで取り上げた五〇か寺は先述の史料の如く無住であっても村役人が連署して、僧録に中本寺編入を申請している。特に注目すべきは無住寺院で、小栗須慈雲寺が大本山永平寺に直末願を出している史料である「小栗須慈雲寺指上一札」によると、

差上申一札之事

小栗須村慈雲寺禪家曹洞宗古来より本寺無御座候、今度寺々本末御改二付、越前永平寺ヲ本寺ニ相定申処、紛無御座、以来如何様之儀御座候共本末之次第違背仕間敷候、此外住僧移替之時者、本寺へ相談可仕候、為後日一札仍如件

寛文拾壹年亥十月三日

小栗須村慈雲寺 無住

小栗須庄屋 伊兵衛 印

同 年寄 兵三郎 印

(中略)

第2表 曹洞宗 紀伊国牟婁郡諸寺院本寺編入の覚え (1671年現在)

	村名	寺名	僧侶有無	本寺名	1707年 本末帳	1747年本末帳	現存
1	竹原	東光寺	○	全龍寺	○	○本寺可睡斎と有	○
2	下尾井	見福寺	○	〃	○	○ 〃	○
3	小森	清水寺	無住	〃	○	○ 〃	○
4	小松	松林寺	無住	〃	○	○ 〃	×
5	伏拝	福寿寺	無住	〃	○	○ 〃	○
6	大居	東光庵	無住	〃	○	○ 〃	○
7	請川	祐川寺	無住	〃	○	○ 〃	○
8	皆瀬川	大蔵庵	無住	〃	○	○ 〃	×
9	小津荷	向林庵	無住	〃	○	○ 〃	×
10	耳打	泉蔵庵	無住	〃	○	○ 〃	○
11	楊枝	浄楽寺	○	〃	○	○ 〃	○
12	日足	松林寺	○	〃	○	○ 〃	○
13	楊枝川	円通庵	無住	〃	○	○ 〃	×
14	能城	泉蔵寺	○	〃	○	○ 〃	○
15	山本	永福庵	無住	〃	○	○ 〃	○
16	棕井	円明庵	○	〃	○	○ 〃	×
17	赤木	宝泉寺	○	〃	○	○ 〃	○
18	滝本	瀧仙庵	無住	〃	×	○ 〃	×
19	大山	光泉寺	○	〃	○	○ 〃	×
20	鎌塚	吉祥庵	○	〃	○	○ 〃	×
21	浅里	大滝寺	○	〃	○	○ 〃	○
22	高田	高善寺	無住	〃	○	○ 〃	○
23	平尾井	円通寺	○	〃	○	○ 〃	○
24	木ノ川	宝珠寺	○	最勝院	○	○	○
25	高津気	青原寺	○	〃	○	○	○

	村 名	寺 名	僧侶有無	本寺名	1707年 本末帳	1747 年本末帳	現存
26	宇 久 井	延 命 寺	無住	最勝院	○	○	○
27	神 之 内	善 光 寺	○	〃	○	○	○
28	成 川	瀧 光 寺	○	〃	○	○	○
29	阿 和 田	光 明 寺	○	安楽寺	○	○	○
30	〃	慶 松 寺	○	〃	○	○	×
31	有 馬	東 安 寺	無住	〃	×	○	×
32	中 立	瑞 泉 寺	○	長徳寺	○	○	○
33	〃	宝 指 庵	○	〃	×	×	×
34	大 栗 須	光 明 寺	無住	慈雲寺	○	○	×
35	板 屋	宝 泉 寺	無住	〃	○	×	×
36	大 河 内	大 徳 庵	無住	〃	○	○	×
37	円 山	円 成 寺	無住	〃	○	○	○
38	花 尻	長 命 院	○	東光寺	○	○	×
39	〃	七色庵室	無住	〃	○	○	×
40	高 岡	善 応 寺	○	龍雲寺	○	○	○
41	三 輪 崎	霊 樹 院	無住	〃	×	×	×
42	大 桑	福 昌 寺	○	青原寺	○	×	×
43	古 座 浦	青 原 寺	○	功雲寺	○	○	○
44	小 栗 須	慈 雲 寺	無住	永平寺	○	○	○
45	玉 置 口	玉 泉 寺	○	慈雲寺	○	○	×
46	木 津 呂	延 命 寺	無住	〃	○	○	○
47	嶋 津	瀧 徳 寺	○	〃	○	○	○
48	湯 之 口	吉 祥 寺	無住	〃	○	○	○
49	小 栗 須	清 滝 庵	○	〃	○	×	×
50	田 長	定 泉 庵	無住	本龍寺	×	×	×

参考文献：寛文 11 年「諸寺院江入末一札」（新宮市 宗応寺文書）

1671 年=寛文 11 年，1707 年=宝永 4 年，1747 年=延享 4 年

宗応寺

安楽寺

『南紀寺社史料』六三―六四頁

とある。(中略)の部分は以下の通りで、いずれも連署・押印している。

大栗須庄屋平兵衛・同年寄惣右衛門・同断新藏、円山庄屋七左衛門・同年寄伊右衛門、板屋庄屋吉右衛門・同年寄喜平次、嶋津庄屋勝右衛門・同年寄安兵衛、木津呂庄屋味左衛門・同年寄五兵衛、玉井口庄屋由兵衛・同年寄儀右衛門、湯之口庄屋七郎右衛門・同年寄清右衛門、大河内庄屋九太夫、河之内組大庄屋金兵衛

とある。大本山永平寺直末寺院申請ともなれば大庄屋以下近村の村役人の庄屋・年寄連名で申請していることがわかる。これ等村役人の内、後述する慈雲寺末寺になる寺の村役人達が連署・捺印していることは注目すべきである。

一方で慈雲寺の末寺に編入される寺についても慈雲寺と同様の書類を作成している。それらの寺は次の通りである。玉井口玉泉寺・木津呂延命寺・嶋津瀧徳寺・湯之口吉祥寺・小栗須清瀧庵の五か寺である。これ等の寺が所在する村役人と大庄屋が連署・捺印して僧録寺宗応寺・安楽寺に提出している。なおこれ等五か寺の内三か寺はこの段階で既に僧侶が居住している。即ち玉泉寺・瀧徳寺・清瀧庵の三か寺である。

宝永四年(一七〇七)「紀州牟婁郡中曹洞寺院員数覚」の欄をみて頂きたい。○印はこの史料に所収されている寺である。寛文十一年から数えると三七年後のことであるが、四五か寺確認できる。これに対して×印、つまり廃寺は五か寺で全体の一割である。次にその四〇年後の延享四年(一七四七)をみると、○印は四四か寺と一か寺のみ減っている。×印は六か寺である。殆ど変化が無いとみて差し支えないであろう。

しかし表の一番から二三番までの箇所をみてみると、中本寺が新宮全龍寺からその本寺である可睡斎の直末寺にかわっている。宝永四年段階ではこの表の通り全龍寺が中本寺であるので、一七〇八年以降に変更されたものである。その理由にははっきりしないが、可睡斎は曹洞宗触頭の関三刹と同格の権限を持つ大寺であるので、これらの末寺を全龍寺から取り上げたものと考えられる。

また〇〇庵とあったものが宝永四年で寺に昇格したのは次の通りである。東光庵↓東光院（延享四年東光寺）、向林庵↓向林寺、円通庵↓円通院、永福庵↓永福寺、円明庵↓明光寺、大徳庵↓大徳寺、清瀧庵↓清龍寺、七色村庵室↓常泉庵等のようにそれぞれ昇格している様子がうかがえる。また延享四年（一七四七）には泉蔵庵↓泉蔵寺、瀧仙庵↓瀧泉寺と昇格している。以上みたように寛文十一年段階では庵号であったものが、続々昇格し、寺名を称していることがわかる。

寛文十一年に成立した五〇か寺の檀家数はどのくらいであったかをみると、明治三年（一八七〇）十一月新宮藩が明治政府の弁官に提出した「新宮藩諸宗本末寺号其外明細帳」（国立国会図書館蔵）によると、曹洞宗寺院はこの史料で五〇か寺の内二七か寺を拾い出すことができる。二七か寺の内一七か寺は檀家数五〇軒以下の寺院である。曹洞宗の檀家数の最低が一七軒、最高が一二一軒である。単純平均で算出すると一か寺当たり約四八軒の檀家数である。中央値をとると四六軒である。新宮藩の一向宗寺院と比較してみるとこの地域の寺数は少ないが、東本願寺派末寺は一か寺のみで檀家数は八四軒、西本願寺派末寺は七か寺で、檀家数の最高は安養寺の五一五軒、最低が好浄寺の三三軒、平均檀家数は一九四軒であるが、これは安養寺の檀家数が数字を引き上げているので、中央値をとると六〇軒となる。

この時期（寛文十一年）に成立した曹洞宗寺院で現存するのは二九か寺で、五八%、廃寺が二一か寺で四二%である。以上寛文十一年の史料を分析してみたが、これらの証文も寛文五年と同様に書式が殆ど同じであることがわかる。こ

れも前回同様僧録寺院があらかじめ案文を作成して末寺住職・村役人に書き上げさせたものと思われる。

むすび

曹洞宗の近世的寺院の成立過程について和歌山県新宮市宗応寺の史料を分析した。その結果いくつかの事実がはっきりになった。

第一に、ここで取り上げた寺院の多くは寺請制度の成立により、寛永末年以降村落側の要請により新たに創立された寺があることがあきらかになった。

第二に、曹洞宗においては、寺院本末制度は寛文年間の段階でも確立しておらず、曹洞宗全体での把握は延宝九年（一六八一）「寺院明細帳」提出の時期か、宝永四年（一七〇七）頃まで待たなければならなかった。

第三に、地方僧録寺院が新寺創立の認可・本末制度の成立にかなりの権限を持っていることがあきらかになった。

第四に、この地域の曹洞宗僧録宗応寺の記録では寛文五年には七八か寺、寛文十一年には五〇か寺、合計一二八か寺の新しい寺院が創立されているが、牟婁郡の一方の旗頭である僧録安楽寺にも同様の新寺が創出されたとすれば、推定の域を出ないが牟婁郡曹洞宗のみでも二五〇か寺前後の新しい寺が創立されたと考えられる。それ以前の成立のものも含めると、最盛期には約三〇〇か寺前後あったと思われる。ところで、旧牟婁郡地域に現存する寺院は一五九か寺（三重県一〇五か寺、和歌山県五四か寺）である。

第五に、この地域では寛文十一年頃までに成立した寺院が滅罪檀家を獲得することが可能であったことをあきらかにしている。

第六に、寺院の昇格コースは庵↓寺になるものが多いことがあきらかになった。数は少ないが庵↓院↓寺のコースもあったことがわかる。

第七に、寛文段階で無住であった寺の多くは廃寺になっている。数は少ないが無住であったもので、現存し、住職が居住している寺も合計すると一二か寺ある。

第八に、廃寺の様子をみると、寛文五年の分が四〇か寺、寛文十一年の分が二一か寺である。しかし廃寺率でみると寛文五年は五一%、寛文十一年が四二%と、相対的にいえば寛文十一年の廃寺率が少ない。このことは寺の成立時本寺を決めていたために数多く生き残ったともいえるが、今後さらに検証してみたい。

最後になったが貴重な史料である『南紀寺社史料』をご恵送くださった関西大学名誉教授園田香融先生には深く謝意を表したいと思う。